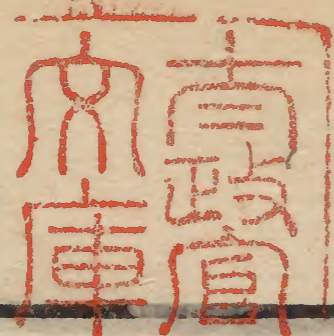


Handwritten text in vertical columns, including a faint rectangular border and a red seal at the bottom right.

豊田家藏

Blank page with faint horizontal lines, possibly indicating ghosting of text from the reverse side.



竹取翁物語解卷第四

おとよこ子あり



飛驒高山 田中大秀 著

中ねるると海をいかによきとていふものゆゑに
 とての葉をいふはしるすよきとていふものゆゑに
 何の世にもあつたことありしとていふものゆゑに
 ありしとていふ子安貝とていふものゆゑに
 ○石上の麻呂の姓の下字を付て割て抄本もあつた類本
 によつていふはしるす其外の本どもあつたりしことありしこと
 皆誤ま

○竹取翁物語解卷四

且今改つるよしハ上よ委しく云つるハ妻居の段ハ麻呂マロと
 ぬをより謀るよりふりあてと名と心得て此ハ脱つりと思て猥
 ハ補ふるもの終ハ今削去つハ字ハ類本よ終り○家よつる
 ぶとのことハ大伴大納言の我家よ有と何人人を召集てと宣ハ
 一同意と此ハ詞を更て語まなり。さてはらるるハはらるる
 の約ツケハ云と同じく男共の方ハ就く云言なり。中納言の使ツカハ方
 々云るハあはれハ○燕ハ巢カネとひひらハ和名抄ハ孫マコ切韻云
 鳥巢在穴曰窠カネ音カネ在樹曰巢カネ音カネ曹訓須一
 宇治拾遺カネ卷六ハ鷹の巢カネハ
 と見付くハ何ハ鳥の巢造とすハ云ハ木枝とすハ埴土など
 ハ昨持来造然云なるよし○まは諸本や又用など誤

下ハ役と改つてハ料字の音なり。字書ハ連條切量也度也數也
 又人物杖質也杜甫詩山色供詩料右大将景政北山の空
 女の料ハコサキ一重小褂コサキ差貫サヰ子ハ料ハ絹の差貫摺狩衣サヰ袴ハカマなど裏に
 入るハなど何り○子安貝ハ類本古板本ハ何處も子安の貝と
 の字何り抄本此ハハナシ末ハ有処ハ何り今ハ无ナき本とあり
 〇鷺を數多殺しを見るハ男共子安貝ハ腹中ハ有物と心
 得かく申マウなりハ字類本に後加つ○但タハ徒タと云言の轉マウ

當時既く比と爲と亂く聞えし又比と爲と通ふ例あり
為と通ふ 未考○飯のしくハ飯を調と云に今俗はメシタクと云
例ハあり 訓字鏡ハ燐之善反上炊也 熬五高反煎也煎魚
同じ炊爨スキザシと加しくと訓字鏡ハ燐伊比加之久 熬鳥菜等也亦留又
伊熬五到反熬也熟飯と云に○屋の棟おはくのおちごつた燕
留熬也奈戸又加志久と云に○屋の棟おはくのおちごつた燕
すすむひと云にハ活本はくをけくとも鮮べうハ諸本を
ると何ると今改つ今世はくと云物ハ柱の外ハ屋の傾ゆるなご
支ふる物を云に其ハ非じ又はくハはくの誤りく和名抄ハ功程
式云束柱豆賀波と何る其ハ穴毎ハ屋を建る時束柱ハ穴を穿て
立て後ハ不用して大仏殿の柱を物欵さばく燕ハ穴ハ巢ハ小物
にあはべ故於按ハ燕ハ巢ハ屋の内にて昂の上なり然ハ壁ハ烟と

出ハ穴をて燕も出入り便するは其を掘り穴をどくに巢と
わらへくわらへ其ハ就く按ハ飛驒山中く農家は屋の梁より上
ハ簀子を敷く二階の如く構へ冬ハ烟草を乾かひべ類の物
を置復ハ蠶を飼処とけしと云に若ハ古代も梁より上と云名
く敷物なる屏をもけしと云けの梁より上をば棟近き処も
軒の方へハ竹のさばる屋の棟おはくも合ハ烟を出ハ穴も有は
き處なり 火爐の上ハ釣る物をあまると云古名も斐太ハ
遺るれハ其より上の処とけしと云も古名もてはくハは
の誤りも何と云に○あめなるを男ハ繼躰紀ハ元年天皇
心委命莫盡忠誠と云に忠誠ハ公ハ仕に心正しく眞実を尽し意
也又遊仙窟ハ斂色言正其顔色と云に眞成不謾正首於眞成也

と活々ツギツギ嘲笑方とし面白き方ハカ響る方ハ於むろしの略めく於ろしと
 可書と田中道麻呂の説ハ後て師ハ定らるる今ハ蜻蛉日記ハ
 をろしとヲ固カタ云懸ツるによりて嘲笑ハ歡笑ヨロヒをろしと云ハ唯笑
 こゝろハ何ニも同意トして然書ツ是ハ人々の論ヲ後て思定ツ笑を急ハむと云言
 ちハさとのえハまハいと云ハ歡笑トほハむと云ハ嘲笑トなるハは
 もハむハと云ハ同意ナまハ其ハ准ハても知ハべきなりハ○ハもハむハ道理
 合ハ諾ハる由ハ云ハ玉篇ハ尤ハ甚ハ也ハ要ハ也ハ勝ハ也ハ最ハ也ハ尤ハ也ハ極ハ也ハ此字とモツトモ
 訓ハ○ハもハむハりハらハ中納言ハかハくハよハきハ方便ハ未寄思ハしハとな
 ○ハもハむハ興字の音なりハ字書ハ虚疑切起也盛也尚也ハとハもハ師
 漢音キヨウ 上のをハりハにハ更ハもハ有哉ハと宣ハるハ同意ナなりハ土左日記
 呉音コウ

二月九日 今奥ある人所ハ院ハ似ハるハ歌ハのめハとハなりハ○ハ何ハなりハひ
 渚院の条 慶雲三年元明 詔ハ是ハ以ハ親王始ハ而王臣百官人等ハ乃ハ淨明心
 續紀の 天皇即位の 以ハ而ハ弥務ハ弥結ハ阿奈ハ比ハ奉ハ輔佐ハ奉ハ依ハ而ハ志ハ此食國天下之
 政更者平長將在ハ止ハ奈ハ所念坐ハ師ハの解ハ卷ハ云ハくハ阿奈ハ比ハ奉ハ輔佐
 奉ハ同意の言と聞ハるハりハかハくハて言ハの然云本の意を考ハるハに足荷ハな
 るハげしハ凡ハく足ハハ人ハも器ハもハ下ハ在ハるハ掲支持物ハなり荷ハハ物ハを掲
 持ハと云俗ハハ柄ハの両端ハ子物ハと著ハて擔ハとのハミハるハふハハハりハなりハ
 其ハくハハ限ハらハざるハ更ハなりハかハくハまハバ此言ハ物の足ハハ掲支持ハの如ハく臣
 の下ハ在ハて君と輔持ハと云ハなりハ和名抄造ハ具ハハ麻柱ハ阿奈ハ比ハ道麻
 麻ハハ腹ハの誤ハ小右記長和四年造内裏の更ハと記ハすハはハるハ処ハもハ安奈
 なるハべハ

く籠ハ釣と云へど細と云ふハとリと不云ぐハはづのハバリ
 と訓つ。和名抄蠶絲具ハ唐韻云終訓久流トビ絡絲取也と云え繩葛ナハカウラハ
 類の歌ヲ來るハ兼くよめ。皆是なり。○みそをなんハ抄本ハみひ
 ちを類本ハなんと云。今ハ活本ハ從つ。○いせよはし吏なりハ承引
 る答乃言なり。さて此ハ彼井人の者どもハ麻柱と壞て歸へく何度
 しみふ吏と略りり故次の詞彼者どもハの心と云へ。如く聞やをり
 中納言ハ方ヲ就く云すハ麻柱と壞ふを人皆歸るをみひぬと
 ぬべき処なり。○何なるひと云ふちてハ諸本とほしハ人皆云とあり
 し字ハちと誤下して字と脱くる。此言放ハナツと同格ハ言のハ衝ハ
 所謂左行四段こぞしと多行四段こぞちとハ活ハタラ用りり故尤と云

ち矢とをたつと云ばよとをたつと云ふハと云く宜しうらんやそ然
 せバ此ハ必こぼちてとみふこと上のこぼちてハ同じ。さて此言
 みのつりなる時ハ良行下二段の活こぞれこぞと云ふはり上ハ
 引ゆる今昔物語ハ彼寺のこぞれと云。大和物語ハ俊子こぞ
 ちと云。家サま。俊隲サ卷サハサこぞれと云。部サのサもサ。屋サも皆こぞれ
 と云ふことなり。ハ星霜を經く自然と破壞ツクきつるも人の態
 と壞ツクちつるハ何ツク水ツクのツクこぞれと云。水とこぞれハなご云ハ別な故
 今改つ

ちみそをなんハ抄本ハみひ
 ちを類本ハなんと云。今ハ活本ハ從つ。○いせよはし吏なりハ承引
 る答乃言なり。さて此ハ彼井人の者どもハ麻柱と壞て歸へく何度
 しみふ吏と略りり故次の詞彼者どもハの心と云へ。如く聞やをり
 中納言ハ方ヲ就く云すハ麻柱と壞ふを人皆歸るをみひぬと
 ぬべき処なり。○何なるひと云ふちてハ諸本とほしハ人皆云とあり
 し字ハちと誤下して字と脱くる。此言放と同格ハ言のハ衝ハ
 所謂左行四段と多行四段とハ活用りり故尤と云

於て〜密に察にしま〜共同一時なると再度
云ふなるをりり さねど燕夜しも立回る ○〜の下の字何
まりし若ハ脱き〜○申や〜抄本は字補ゆる直し○尾をさ
きび〜抄本は後で改つ諸本を〜誤あるべし○荒籠
〜人のき〜古本は後つ諸本の不きと 不 字ハ衍あるべし○
鷺の巢は手と差入させ〜抄本此十一字と脱きり○物もあしと申
は此は字元 ナラ あ〜し〜聞か然 サ ども悪ハあ〜○誰ぞ
〜落凹物語 卷 二 子 箇の袋縫べき人なるは継母せ
処一持来 ニ 方なく部屋はこめ〜女君の
〜藏人少将箇の袋逢す〜に取らぬ人のおぼろめよりに
〜手もふぬぬ〜にゆ〜煩〜て北方は是唯合縫〜と云

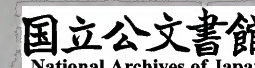
〜意ぞ〜能似〜誰が此更ハ爲得べきと思回らぬは爲え
し人を不思議と宣く御自己物しぬふなり○籠は乃〜抄本は
後つ諸本のりりて類本入〜何り○手をさ〜けてハ健冬さ〜け
ハ〜入お誤あ〜と云け〜諸本皆さ〜げとぬ〜詞も尾を
さ〜げ〜廻合〜何終バ即さ〜け〜直し○手に平める物を
は〜時ハ類本〜ハさ〜り〜時 ハ 字 ハ 何と上 ハ 段 ハ 歩駿
する馬を以て迎〜時ハ〜同し語勢なり○翁も〜り
ハ此翁〜ハ〜と宣ぬふなり彼翁の謀計〜更なるは其
許が云如く貝〜態を爲得〜悦〜翁と喚係〜宣ふなり落凹
物語 卷 一 ニ 三日夜調度飾等 ハ 物
〜とき調得て悦処 ハ 嬉〜又常は自誇と云

ふり貌云と さへ翁ハ中納言御自と宣つ ○綱を引すをして
ハ釣上る籠を下さん ハ綱を延し遣べきを周章て却く強
引過し物子障など ハ繩の断切るなり ○綱もハ切るな
と古く緒糸繩なるハ断切と絶と云と ○すれもハ類本と記抄
本ハ ハ悪し抄に抄る一本と云ふもちとてハ字なり
よき圓珠菴雜記にすれもちやうて同意なりと俗に切ルト直ニ
切ルト其俣など云すの如し万葉 卷ハ大神女郎贈歌 深とくきハ鳴之
登時君の家にはゆくと追ハ到り ハ貫之集に春立すれも
毎君の爲千歳摘べき若菜やうりと續後紀に嘉祥元年七月甲申
因幡國宇倍神奉授從五位下即預官社以國府西有失火墮風飛至府

舍將燔國司祈請登時風輟火滅靈驗明白也谷川氏云晋書載記に登
加罪戮芥隱筆記に房杜傳登殺用唐律即時爲登即時殺之博物志に
即日登日と書と云と枕冊子 雪山 里あくと明る即大夏をし
く見き 宇治の中君中納言ハ文宗らき 例なり
ばゆ 後とく物し 断れハ詞 例なり
諸の物語書 即と云るハ皆此意なり ○や ハ島と云名ハ何 加 ハ義の未思得 和名
智紀 子大炊省有ハ鼎鳴云 文德紀に齊衡二年十二月大炊寮大八
島籠神火武主比命庭火皇神並授從五位下三代實錄に貞觀元年正
月大炊寮大八島籠神八前授從五位上あり ハ島と云名ハ何
抄金器 子說文云鼎 賀奈倍 三足兩耳和五味之寶器也 古史考

語續けのゆく鼎上より下しオロ其より前なりし更を於
て語り語まゝなるべし故に辛じて息出ぬと云と辛じて御心
をいふは問と同一時より辛じてと云二重なり一と聞えり然
然の息出ぬと云は向して次の更を云はばまをぬくもよき傳寫
ほげに次文は續うぬをりぶらうてたがしらせし物うさげおろし
は共は同意なる更を例の重なり言なり○御さうはいのびおん
さもつとさくやいふおんやうりと答ぬふと云意は係まり古く
病とくちと云けとど此は只御心持なり夕貌卷子某院みく夕見
君絶入るる処
はゆはゆは氣色なり物怖とまんりぬくをさせぬ御本上りて
いのちがゆふとにうく右近きことと云此は似たり○いさか下

落凹物語卷に女君悩め
ふ処胸乃痛く侍はれと息出下りし猶
菊宴卷上り引可考○物を覺ゆれば落凹子女唯今更に物まん
ほぬといふはゆはゆなり○腰まんまごりゆぬは類本は後改つ
諸本うとゆゆぬと誤まり下り御腰ハ折りけとゆゆり和名抄子説
文云腰放宵反或作
費和名古之身中也遊仙窟云細腰支師説古
之波勢玉蔓卷子長谷詣
子歩疲
更と足の裏うとゆゆぬとあり○先志とくさうて來ハ抄本を字と
脱ちり夕見卷子物氣出
ゆ処宿直人おろしゆゆゆ差る糸まと云へと
宣へて宇治拾遺卷九子
醜き智取
ゆゆ処にさて面ハゆゆ成るるゆゆとて脂燭
さして人々見ゆゆ和名抄子雜題有紙燭詩紙燭俗音
之曾久江次第るハ
脂燭と作とこハ下知の言ゆく來まよと云意糸まとと
も同意なり古今恋
四



月夜よし夜吉と人う告やうをこつふ子似ふり不待しあふん。
小世継物語の螢の飛何りかと彼とくこと此童子宣いけとバ
何と○此貝のほこまとい諸本とくことこの貝と書ふ終
バ讀誤るると本居翁上のこハ來もく向しと此貝と讀べしと云遣
と終まさとかふ物ヲ貌なりハ云はくもあふの更なる終と幼げ子
愛親して斯のいふふなり阿陪の大臣は唐國の方子向て何れ
すまて伏拜ぬひしは似る意なきなり○御としめかけは臥
なつら頭をもちと持擧るもふなり頭を御としと云更古ハ見え
び此比よりは更なるべし師云和名抄は首加字倍頭訓同上云賀
之良と何と又願加之良乃加波良觸膝比登加之良なるもも加

之良と云ぞ正し名なる美久志と訓ハ凡そ貴人のをバ後にも加
之良とハ不云で然云め終と久志ハも髪之更のとけつると云
も髪をけつるなりさて髪をけつる具なる終バ擲るも久志とハ云歎
其ハとけつると云べきと畧て然云ハ譬ハ庖丁がはらふ刀なり
を庖丁刀なりとやうて其をも庖丁と終もつひ田子の持桶を終
ハ田子桶なりと田子と俗の云も同じさて髪のある処なる故も頭
ともことしハ云あかべも髪方なり然ハ何と擲の名ハ甚古
け終バ此と本よ其を刺処なるあも髪とも頭とも云ぬるべし
のうま終頭と云ハ古語なりと記傳 卷五云終なり○御手をひろむ終
つふハ握ぬる指を起し開ぬるなり指折と手を折と云と伊

花子おとちびさせぬふとまろく明らるるなり○やむくやと病を
 をあり古吏記火神と生坐病臥在るをやことやきり訓尋常は
 病る非で幼き態より為出ぬ病なれば恥く人子知せしと志
 けふなり○其を病めハ腰を折ぬひし上に人の知らぬを心
 痛く恥く病めぬ又其の病となれる由なり○ひひけりハ類本
 子字なし○貝を得るべハ類本貝ともハ衍なりへし○云
 よりも人子聞笑たま九字類本は脱きり此より以下ハ上子云る
 吏を再夢しく云るなり○日よそくハ日よそく云はき格の
 言なるを歌も皆のく云例なる吏師の玉霞を夢云はり恥く
 思ふ心日く弥増くし病の重くなれる由なり

とてかやちまてまひしはらうら歌
 幸々々々後々のまひしはらうら歌
 うらうらうらうら

○とてかやちまてまひしはらうら歌ハ諸本や歌写本ハ歌と誤まり
 姫の贈きを受る方より云言なれば必はらうらと云べき處
 ちり上妻同の段やちまてまひしはらうら可考○哥年を経く云
 ハ待を松子代を貝子云よせ立よぬの序子浪と云よせ松子名
 ぶふ住吉の詞もてちまてまひしはらうら一首は意ハ前年ハ毎日毎夜
 来通ぬのしを打絶く久しく立寄ぬべ我ゆのこて待てぬ貝
 も無しと承ゆるハ実くちまてまひしはらうら古今恋五子久しくも成よる哉住

省て直に姫と催吏と語るなり○よかかちもあづむる上同妻

段にも能くあづむる形を云ふなり○うらもるるもあづむる古史

記穴穂大長谷皇子と市邊押齒未日出之時忍齒王到大長谷王假

宮之傍而詔未寤坐早可白也夜既曙訖可幸獵庭乃進馬出行爾侍人

等白宇多互物云王子故應慎以上大長谷王の伴人ども忍齒王の朝

は申し何れ此は似る終りの字一補つ物のいふよと改むと思つ

ど不然でも能きと又此は調も悪く終りて置つ轉の解ハ上

龍首の玉は段は有り姫のいづれもむきと云るをさしてハ救は違へ

あゝゝのいふや哉と云意と姫が如此云るなり○帝の下は写本

君字あるハ衍なるべし○於るにハ疎畧なり○かや姫の下

抄本の字有り○帝は召てのいふもさして字ハ必誤と聞か故

姑と訓べし○かゝるも終りて帝は召てのいふ奉畏

違背すまはし由を姫の申さば姫ハ恐多吏も不思となり又按

帝王召て後女御位に齋ら終りてと結構なる吏も不思

云意なるべし此うしと云言の吏上ちの段ハ云しと可考○み

ゆげも何れハ勅使ハ姫を見もて立させ終るるを可畏

も不思なり氣墮と云く勅使ハ所見づくもなき様子なり○い

子にやうハあ終りハ今ハ字を補つ写本はあ終りとあハ若下上

は誤るる○いふ心づつらげハ鈴木氏云此ハ心取らしと云

るハ俗ハ氣ツカヒナはる氣ガオケルと云ハ當終りと云はし幼

○此内侍このハ軽く添ゆる言と聞べし○そこのハ皇國言うハま
とんハ音便なりと云と云はよと奏字の音はかく云と字書は則候切人
臣言事章疏曰奏とあり○多オホクの人を殺してけし心ぞうし此言ハ強
くゆる者まてと云る答ゆる御言なり上は多の人ハ身を
徒イカラナシに成くと詔ノミひし同し○と詔るまひく止ヤミまけとハ多人身心
を尽して恋慕ふとも竟ツヒハ不聽過し者なれハ救命なりと容易ヤカに
を承引まじと思食て一度ハ止ぬひけきとなり類本ハ止にゆるき
終ハジマとあり○猶ナラたなしをいおしはしてハ諸本をしなし校本に
従ツく補ツつ類本ハはしむし再更シハ思起しぬひ事謀マカぬなり○
此女のと一本ハおのり誤アヤマりをいおし訓べし即赫映姫な

○謀マカるハ負マテむと思食シハ上ハゆるし此物と云るハ赫映姫男に
あそじとこの謀マカ更シなるとかくて彼五人ハ人々此姫の謀計マカハ皆負マテく
空カラしかるとし當マカて朕ハ負マテぬと強シく思召立ぬふなり○竹取タケの
翁オキと召マく此一句難波人佐野春樹補ツべきよし云つと写本ハ書加
ふるに後ノチハ実マコトハなるとハ汝ニと詔ノミぬ當マカるくは諸本
脱ツきるハ傳ツクるゆるなり○聞食キて又御使ミコトを賜タマしめとなく天皇
ハ大御詔ハ御自己敬言ウヤミコトを詔ノミぬ更下シハ例タトヘを引く姿云べし○かひ
ちかひハ態マタと勅使ツクシを立タぬひ代カヒもなき赫映姫房子アヒミエノハ不相見アヒミエとかな
と○かかふるはぐとやえとらぬと仰オホシらるハ勅命ツクシノミを輕カくし
疎畧ソロに心得習シむべきと何ナニも必救カナラシの如シく姫ヒメを上ノボべしとなり

翁が手に生立オホシタテふらむむと詔ミコトノコトせしむ甚く強悍コハクく養父母ヤシヒオヤの心ココロも從ツグてぬイダシ更シハ未知イダシくし多タきぬあかく宣ノボふなり○翁オホノコは冠カウラをかぶるとのふをせセぎシの類本ルイホンと字ジと脱ダツきり古板本コイタホン一写本イツシャホンに給タマせし作りツクリ何ナニもよヨく宜ヨシし。おしせし訓ツケべきの類本ルイホン抄本セウホンにハるをせし作りツクリ何ナニもよヨく宜ヨシし。宇治拾遺ウヂシヨウイ一イチ願掛ガンケする処トコロに是コノを給タマきし御帳ミチヤウの帷タタミと甚能シキニ置オケて前マエに打ウちつると見ミる云イハふ是コノより外ソトはるぶハき物の元モトもよヨく宜ヨシし。又マタはるみ入イる夢ユメに唯タダふん物を給タマむとてかく返し參マらす。ふ怪アヤシキ更シなりとて又給タマむるを云イハふ假名書カナガキなるハ唯タダふん物モノと云イハふべし。其ソノの效タケく給タマ字ジ皆みなふたと訓ツケべし。何ナニり冠カウラハ加我布理カガフツリなるを和名抄ワナガキも加宇布利カフツリと有アハ音便オンベンなり。冠カウラ賜タマふハ五位イノチに叙シきしと云イハふ小世繼物語コヨシツグモノガタリに勸修寺クンシュウジ内大臣ウチノナリ藤高フジタカ

公キミ若ニガハりけし時栗栖野トクリノの鷹狩トウノリに急雨イツアメに何ナニひも大領官道オホノリノミチ弥益ヤシキの家イヘに一夜宿トヨみひく女メ逢アひ産ウみひし姫君ヒメノミコ子コ宇多天皇ウタヒメノミコは娶ムスむと后ミコトと成ナり醍醐タカゴ天皇ヒメノミコと産ウみひし依ヨて弥益ヤシキをシ四位イノチに成ナしめひし故ユヘ更シは例タトヘと思オモへし

翁オホノコは冠カウラをかぶるとのふをせし作り何ナニもよヨく宜ヨシし。○悦ウレシくハ冠カウラ賜タマふと有ア更シとなり○かくはるし冠カウラの更シなり○猶ナカやシいかく翁オホノコハ冠カウラをかぶるとのふをせし作り甚シきとて更シなり其ソノの於オケては仕シ奉ホウめぬの仕奉シホウめへしと云イハふ山辞ヤマノハシの更シハ上ウヘの段ノハシ子安貝コヤシに命ノチを救サツやくせぬと云イハふ歌ウタの解トキ云イハふ

かまや姫さしきしはくおさきしひまほしひの仕まじしと思ふ
をせひく仕まじしせむを消うせむをせむすむひのこかきし
はくしすまじしきぬをのりぬ

○もくし師記傳十五云專ハ一筋に方よしと他義を交へぬ意なり
用ふり全字一字を訓る皆其意なり○強ク仕奉るを消亡
なんぞハ公羽官位を得よ欲て強ク官仕は出し立ぬを身を失ひ
命を亡るも官仕ハきしとぬり此ハ消亡と云るハ常に死更と消入
ぬど云ハ異る實に火の消雪はきぬるの如く身體消亡と先口
去る意なり下に影のやうなり又本の形骸は成なるを術の
ふと思ふしなんぞハ下天羽衣の段に迎に人々あはれんすとも同

じ末を係く云置言なり宇治拾遺卷五本院侍後の許は何ぞ拾遺戸
を開たのら忘て來にけしきとめて誰の所なるか出入りたぬぞお
ど煩るし此更に成なんすも帰らぬ程ぬるよし云著聞集卷十に
競馬の高遠と國文と定下されけり高遠を強力の聞る國文ハ
小男無力者なりけし疑なく取て投ら終なんす人々思ふり
けしとあり○こしきと冠仕奉るはあて官の卷に源侍役の更を
しと人と等しく賜りたりしは官かきしハ位なり
○字ハ翁を敬く御官と云姫の官仕は就く賜ふ官位なり仕奉て
と云○志ぬをぬりハ一旦勸後官仕はしはつり翁の
官位志ぬよししと死むるをぬり上るハ消亡なんす云

を尽しふる。いづれも空しくあして不逢し其人、お思ふ心も有ま
ぬ。是ハ只昨日は浅くおなる。更なり帝の仰更とく其ハ隨着べ
きにあり。いづれもなり。○人聞やきしと云むやきしと云言ハ恥可し
意なき。他の上と思ふ。自の心はわづらふ。方を云恥可しと云ハ廣
く我身の恥なる。更と思ふ意と聞ゆ。或人今俗ハヤサシと云ハ優に
雅なる人。と云む其意を用と万葉卷五玉島や此川上り家ハあはれど
君とやとみ顯さば有きと作る歌を松浦少女が大伴卿ハ對し君
ハ都の品高き宮人。於てはまハ其をやとみと思ふ。うら我賤しき
家所を顯しは恥可し。いづれも含めたるなりと云む。大秀按ハ此哥は
てん其意と聞ゆ。終ど打任ハ然く云難く。べし廣く考む。い

ハ對人ハ心のおの終て恥可し。思を云と聞え。なり恥可しと云も
心の於る。由云ハ紫式部日記ハ和泉式部を恥可し。げの歌
あやハハかたえげと云ハ心置る。歌人ハ不思と云意なる
更上卅の云るとも可考。万葉卷五世間と宇之等夜佐之等思へど
も飛立のつ鳥。いづれも。世間の人ハ心古今俳諧何とて
身の徒ハ老ぬ。ハ年ハ思ふ。更ぞやきし。身ニ積タ齡ノ思処ガ
真木柱卷五本の北方ハ父式部卿宮の宣ふ言ハ。今ハ然今更
ハ人ハを渡して。いづれも。いづれも片隅ハ人ハ後て副物し。け
ん人聞やきし。かたえ。世人ハ心を置け。ハ此ハ同し。いづれも
是等其對方ハ心を置。自己と恥る意なる。を思へ。今ハ俗意ハ甚

轉るるなり。今帝は召は應るは始妻問の段に世にかけし人なりと
 も深き志を不知て逢うと云し心もゆるぐ女御后と齋イッき
 傳カキうは喜ヨロコぶ。様なる心根義理の正直ツツシうぬと世人も欺ウラべけ
 まは其と深く取らむ由なり今の世に諺もかくふ様なるを襟エリ
 も著ツキと憎む同じ意なくなり
 父オホキなる天下アツシタは心もあはれもかたもはしむの何
 ちかたも大なるはなれは猿イサはのりまはるは
 まはるるなりと申さむと
 ○あめもいふと作る本は悪し天下と云も悪し○世
 もかたもいふは全翁モウラの官位も更に係カる答なれば世界の吏

ハ何様もくもと云く身ハ尊タトくても男イメチてもなり○御命の危きこ
 そハ抄本あやふきと宮仕は出さるてハ不死やあると見ぬて
 姫の云と受ける答もくもと申して試見コトミすハ君の命に係る大吏な
 ば然危チカヤシキとくも申しと申り○猶仕奉まじき吏をハ類本ルイホンに狩カり
 云くは術なる。此猶ハ俗ソコにヤハリと云意なり○参マシりて
 むハ内裏ウラに参りてなり
 おもひてはやく侍の心もあはれし心もゆるぐは
 と云くも申して仕シまはるは心もゆるぐは
 けし心もゆるぐは心もゆるぐは心もゆるぐは
 けし心もゆるぐは心もゆるぐは心もゆるぐは
 けし心もゆるぐは心もゆるぐは心もゆるぐは

とくふとるりせとる

○仰の更ハ類本の字ナシ ○加しことたハ救を恐畏ニ奉じ疎略
よを為奉らぬ由を申なり ○彼れをハ赫映姫なり ○参らむと
て仕奉れぬハ仰の如く等閑なりハ官仕の更を種くハ勤め仕奉れ
むと云意なり ○官仕ハ出立なるハ抄本ナとおと作也 晋本
同し必
誤なるハ改補ハ類本出さるるハ誤なり ○造麻呂ハ手に云
上りも詔ミコトナむハ翁ハ手にとり ○子もてハ類本子ハ ハ字
ハナ
しと有ハ後ハ補諸本子もて ○山もて見付るハ カ
ハナ
本ハ見付るはるともてよハ終るハ聞ゆハ ハ
ハナ
子にけりハ詞を加し心得て上り子にけりハ非びとて其意能

聞ゆハ畧々ふなり上りそや等ハ辞なくと結する下ハ
意を合する言なる更言玉緒ハ変格と云けりハ類なりハ ハ
ハナ
諸本ハ付るハカハと作るハ一字一濁り上り着て下を彼者
と云意ハ取らぬハ此ハ如此有故なるハの意と聞らるり ○こ
ころむせハ天武紀 十一年八月
月癸酉詔 ハ凡諸應考選者能檢其族姓及景迹
方後考之若雖景迹行能灼然其族姓不定者不在考選之色とあると
考證に景迹考課令ハ凡定官人景迹功過義解ハ景迹者景状也於言
状迹也選叙令ハ凡應選者皆審状迹義解ハ謂考中功過謂之状也履
行善惡謂之迹也行能考課令ハ功過行能義解ハ善惡為行才藝為能
古今物名 ハ
ハナ 時待所もそ日ハ經ぬハ心むせとバ人ハ見

とくふちのちかき

いふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝ何ういふはしるまの申さるゝ
いふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝ

○何の心もなかくてい古板本は心めしなくともい行なり鈴木氏云

何のいふはしるまの申さるゝ云ふ同じい云はしるまの申さるゝ彼是と思慮分別もあらず不意

なる処はたゞい坐く御覽ぎしはよくなり○あとい俗に千ヨトは

云意なる更上よ云ま○古板本写本に行幸して御覽ぎん御覽ぎん

いふはしるまの申さるゝ

いふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝ
いふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝ
いふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝ

いふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝ
いふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝ
いふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝ
いふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝいふはしるまの申さるゝ

○おここのに急卒なかり思し立く日數の間もなかく御狩は日と定
めふなり○是なむい思してい其光ある人と是ぞ赫映姫なるは
いと推量に定めひくなり○あといいせめよは此一句諸本は漏
ちるい写本は從て補つ○袖とていぬい類本は袖と取く於
ていぬいい校本ぬいぬい○ぬいを塞てぬいぬい
校本ぬいぬい片袖ぬい面を覆ひ隠しぬい○ぬいぬいぬいぬいぬい

ヤト 此言ハ便字をばやくと訓る古言の詠ふるみくはやくとの約
まゝなるべしと千村君の泳宮考に言加へ置つるを考べし
云意と聞ゆ。稻直の俗に平キニと云意と云るもよし。讃岐典侍日記
に局より急ぐる氣色みくきと抄しよせ三位藤三位殿絶入らるる
ひぬと云く。著聞集に坊門院に年來召はるる小式部内侍と仰
らるるはま更なるきと余まと仰はるるは。宇治拾遺三に定頼
中納言云經をばやくと打拳て誦ふりけと云小式部内侍と耳を立
ふややくにさるるはやくと仰り。○影に成ぬハ帝強に率くおえさんと
御輿を寄みよよ依る今ハ適き方なく影に化る形跡を消べ
くきるなり。上は消亡なんすと云るもかゝる術あはるなり。平家物
語青山の段に頭ふるるるを影の如なる者村上御前帝のに參りて唱歌とを

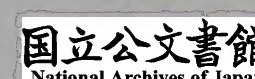
でつり仕ると有ま同じさほなるべし。○そのれくハ師答問録説子妹
のり吾のりと云言ハ如何と道全イカニお問ミナモる答はるるや。此の
と云言ハそのとを約するなりをを畧ぶかを約と約云なりさて
ありとハ後撰恋ニ中將更衣罷出て御文遣しるるハ今日過バ死チよし物を夢みて
も何處イッとたの君ハ問ハおし返返し延喜御製あり。伊勢物語段に何處とたの
とも覚覚ざりけはバなご何るをいと同じく其行あて所と云と云は
る。此を以按アテするところとなくと云をいと同意する何処へ行べ
まとも當死アテなき更なる徒然草に云るも何更と書記とも定カキける更
かの意なり然ハ量字議字も本同意も定カキを云バたののしと云も
定もたかく當もたなき意を本ヤク漸ナリハ取締ナリなる意本意の不達

意又假初なる意死更も云こ此ハ慥ニ取所もなき由なり○こち
 をしとハ俗ニ残念ナリと云意なり○於座セドの下脚詞脱ふるの
 又ハおぢきとを誤るるの今ハ姑然カク割く在べし○げハ赫映姫ハ
 変化の物なる由ハ兼るも聞食知坐キミシシリマシら終ど今かく影と成るう就
 弥クニヒト凡人なるぬ更を思食知み由なり○ささぐハ率行みんとい
 きハ影ニ成るる然計ナバカリハ辭イナとなすハ率行更ハ志終るじとなり○
 御許ミコトハ諸本御やもと何れも寫本ハ役改つ御ゆハ御所な
 る○本の御形と成ぬゆゑ古本御字ミコトハ校本形シヤなり○其を
 見てごまミハ今を率行おぢき更かざる○ハ本の形體カタチごみ見
 還らばカヘ思食よしを詔ハ影と化ナまりしる又本の躰カミと成る

よたあまのまゝ
 幸ニカドなる所もごめくおぢしめさるるまぢきもゆゑの程ガクかく見
 さまさるるやうにさるるゆゑにさしてはまヒラシるるなり
 人々ヒトあまのまゝはさるるまぢき
 ○猶めでつゝハ影と変ナリつるの再本體マタ成ら終バ更ハ改カるる免メで
 る思食由なり○塞止セキジごうウハいつて率行シ思食御心の進シ
 むひけきども率行難ガシら終を唯めさし思食御心ハ塞止難ガシしと
 云る面白シ裏ウラの意ハいつて思食心の進むの塞止セキジごうウ由なり
 ○かくカク思シつツ造麻呂ツクマロを悦ユキみハ造麻呂ツクマロの議ギて行幸ユキ更マと姫ヒメハ
 不令知シラ熟ジュク爲ナリおぢきて帝ミカド見ミせ奉ホウ終マシと甚シ喜ヨシひ終マシなり○百ヒヤク

の心吾心神之此項をなま^{解ハ心利}古今^{雜陸}飽きりし袖の中
うや入るる我魂の无^{オキ}とちするとある此も似るなり○於ち
興ハ諸本御抄本おんとあると不字を補つ大御と云言ハ音便
轉るるおん^イと云も其の約^クなり抑大御と云更古ハ天
皇の御上りおし申しの^{神ハ甚太尊申と}知べし記傳十一可考音便ハ頰^タハふ
一通の敬言となれるなり○奉てハ貴人を敬く俗ハソサセスと
云意めく衣車船など云夕見卷ハ狩の御衣と奉若紫卷ハ御
車に奉る程明石卷ハ夜の明たるの前ハ御舟ハ奉りてなむ何と
○赫映姫との云く製^ミて賜ふと云言を省りり○^哥か^ハふきの
こあきハ還幸なり師説ハ行幸を伊傳坐と云語の本ハ出る意ハ云

つふも有べし終^ハ必^キさ^シても唯往^キけ^ルも來^ルけ^ルも云^ハ今
俗言ハ御出^{イデ}と云を往^キも來^ルも用るも同一意をへたること云終
るも此も還^ルけ^ルハ宮^ノ入^リけ^ルハ然^ル云^ハじ^キの如^ク終^ルも右
の説^ハ準^ル心得^{ベシ}抑此歌末句を始^ハ回^ル聞^ク鈴木氏云背
向^テ止^ルハ赫映姫帝ハ真^ニち^テハ向^テ奉^ル後^ノ方^ヲ向^テ立^止詔
み^ハなり斯^ク次^ノ詞^ニい^ハ歸^ルけ^ル空^ニな^リと云^ハ能^ク叶^フ
と云終^ルか^ク天皇^ノ命^ハ不^レ隨^ル家^ヲ止^ル終^ル赫映姫故^ニ還^ル御^ノ行^幸
を物^ニ出^立け^ル難^ク思^ハ食^テ詔^ハ終^ル御^ノ魂^ヲ止^ルけ^ル御^ノ心^ヲ持^テ
せ^ハ終^ルと申^意を合^スる^ハ物^ニ古^今上^春立^ト花^ハ白
くぬ山里ハ物^ノ音^ハ鶯^ノの^なくと^を師^ハ鳴^トモナ^サウナ^ト



譯ワカき契沖法師ハ文集シニ花寒シ懶シ發シ鳥慵シ啼シとあると引ヒきり字書
ニ懶シ落シ蓋シ切音頼シ憎シ懶シ嫌シ惡シ也慵シ蜀シ容シ切音鱗シ懶シ也と何シとて字中シ有シ
ども結句シ有シも同意シあり死謂シて止シけし止シけ歌シども意シを云シ不盡シ
言外シ含シる格シなり能シく心を着シて然シ含シる意シを前シの詞シニ
先云置シて歌シる省シくいくぬ文シハ工シ甚シめてし〇御返事シハ写本
ニ役シと字シハ補シつ帝シの御歌シハ処シニ赫映シ姫シとあり附シくし聞シや
るシ並シくハ文シの答シと返シ更シと云シ歌シの和シと返シしと云シと終シと伊勢物
語シ段シ十九シニ蝦手シハ紅葉シの甚シ面白シきを折シる女シの許シ道シより云シや君
ニ為シ手折シまる枝シハ春シ乍シかくと秋シの紅葉シ志シら終シて遣シりけ
終シバ返シ更シハ京シニ著シてなんもて来シりけしいつの間シニ移シる色シの

附シぬと君シの里シも春シやあふしと有シハ歌シの和シと返シ更シと云シ此
ニ同じシ又枕冊子シニ行成シ御餅シ飲シと唯返シしと云シし赤シき薄シ様シに云シ
自シあつてらぬ下部シハ甚シまのつらなりと云シん見シゆると紅梅シ子シ付
く奉シると云シハ消息シ文シと返シと云シ〇シむと云シは下シみと云シハ六帖
第六シニ何シもんシ玉シの臺シハ八重シ葎シと云シん中シに二人シと云シ寝シめと何
る歌シの意シ詞シと云シと帝シの率シと云シと云シんと云シと云シと云シ就シ御答シ申シせ
派シやと自己シハ葎シの延シ繁シと云シ下シけ賤シし伏シ屋シも年シ經シス住シ馴シ信シ
し身シやる物シを今シ更シ何シし玉シ臺シの美麗シし御殿シ子シ終シと更シ更シを願シえ
やと云シと葎シハ和名シ抄シハ本草シ云シ葎シ草シ上音シ律シ和シと云シを万葉シ四シの五
ニ牟具良布能穢屋戸シ云シ又シ十九シの牟具良波布伊也之伎屋戸シ云シ
卅シ四シ丁シ

六帖 歌ハ万葉一なる玉敷有家毛何將爲八重六倉覆小屋
 毛妹與居者 結句之の豆の脱 脱を詠傳ふるの第四句本よ
 是と帝御覽とてあるハ返し歌ハ赫映姫口自奏つとんと思
 御心ハあつと海へも流るるをけりては
 〇是を御覽とてあるハ返し歌ハ赫映姫口自奏つとんと思
 かくるハ物は書て獻つるなりけり〇いふに歸れんと空もぬけ
 帝御心ハ還幸を懶とていふ上よ又一事とて弥留とよく思食由に
 〇是を御覽とてあるハ返し歌ハ赫映姫口自奏つとんと思
 かくるハ物は書て獻つるなりけり〇いふに歸れんと空もぬけ
 帝御心ハ還幸を懶とていふ上よ又一事とて弥留とよく思食由に

歌の八重葎這らん中よ二人こそ締めとめを思召し又更止りよ
 思成ゆひと玉臺よ歸れとせむ此姫なつてそかひなく思食
 彼歌と共に唱習つふ 六帖よ並 葎生と荒る宿の恋しき玉と
 造る宿も忘ゆぬと云歌は意も成ゆひと此竹取る賤し宿も
 も迫て一夜たよ御寝すしと歸れとほりて夜を更し終つふさ
 ほよ執成る工つと面白し心を著てさて此六帖歌を思し依て歸
 難くさゆ由を令知せとて本歌は詞を皆取唯末一句を残し
 るは帝ハ却て其結句よ 二人こそ寝 思食はきつとや歸難く思
 はず由なり斯く赫映姫ハ帝の本意なく還出よんを欺ふる意を言
 く作るとまわり空もなつハ氣を失ひつとやなる処よ云て家持

〇是を御覽とてあるハ返し歌ハ赫映姫口自奏つとんと思
 かくるハ物は書て獻つるなりけり〇いふに歸れんと空もぬけ
 帝御心ハ還幸を懶とていふ上よ又一事とて弥留とよく思食由に
 〇是を御覽とてあるハ返し歌ハ赫映姫口自奏つとんと思
 かくるハ物は書て獻つるなりけり〇いふに歸れんと空もぬけ
 帝御心ハ還幸を懶とていふ上よ又一事とて弥留とよく思食由に

集と云物も天漢歸らるる空も思ひつゝ不絶別と思物なり。明石巻に

天変の条 家を離境を去り明暮安き空なる歎めあり。宇治拾遺三巻

虎の難を除 肝心失く船漕空もなきてわが御心もなかり

なく帰るゝと志めよと供奉人の勧めげきまよひとぞとて

さるし○ささるゝ夜を明しめほほきまよひ何れ縁ごの類本は後

も字を補つ甚つゝ帰るゝよしほひの夜の変更るゝまよひ此詞

さるし○ささるゝ夜を明しめほほきまよひ何れ縁ごの類本は後

も字を補つ甚つゝ帰るゝよしほひの夜の変更るゝまよひ此詞

さるし○ささるゝ夜を明しめほほきまよひ何れ縁ごの類本は後

も字を補つ甚つゝ帰るゝよしほひの夜の変更るゝまよひ此詞

さるし○ささるゝ夜を明しめほほきまよひ何れ縁ごの類本は後

も字を補つ甚つゝ帰るゝよしほひの夜の変更るゝまよひ此詞

さるし○ささるゝ夜を明しめほほきまよひ何れ縁ごの類本は後

も字を補つ甚つゝ帰るゝよしほひの夜の変更るゝまよひ此詞

かきつゝあはれおぼろけの影もほろけぬとぞ思ふ
あはれおぼろけの影もほろけぬとぞ思ふ
あはれおぼろけの影もほろけぬとぞ思ふ
あはれおぼろけの影もほろけぬとぞ思ふ
あはれおぼろけの影もほろけぬとぞ思ふ
あはれおぼろけの影もほろけぬとぞ思ふ
あはれおぼろけの影もほろけぬとぞ思ふ
あはれおぼろけの影もほろけぬとぞ思ふ
あはれおぼろけの影もほろけぬとぞ思ふ
あはれおぼろけの影もほろけぬとぞ思ふ

○赫映姫の傍に寄つて非をりりか按本寄へくも何り師の

玉勝間ハ此詞の更を俗語も物を競てこも亦く劣まるとぞ思ふ

もよぬと云ふ同しと云はれり紅葉賀巻よ源君と頭中將と舞め小処に立並

ハ花源氏との傍に深山木頭中將なり嵯我院巻よ仲頼右大將の饗應

る処はいづれもめでふく何れりも光赫くやうなる中に天女の降る

ふやうなる人あり仲頼是ハ此世間ユノチ名立るる九君何れなるべし

と思ひて見るよせん方なし云かくて家子歸る病よ成て臥する処よななくめで

し思し妻も物もおぼろけ片時もこの恋し悲し思し

前子向ひ居る終るも目よりもふらびこゝ人より云宇治拾遺卷六に
 羅刹女を南天竺と云ふ似り帝御覧する云方なくまつ若干ソコダの女御后
 を御覧し競るに皆土塊ツチシの如し是ハ玉お如しなと似ると云ふ更なり○
 唯獨すをしめふ抄本後大伴大納言本の妻どもを追捕と獨
 明し暮しめふと有同し意をななり。宇治拾遺卷九美濃國の人妻やも
 めも過しけるのなり。寫本の獨すと終ふと類本の何り其
 も宜し幻卷去の後獨住ハ殊カかと更ナけと云と何り類本
ハ悪シ○となくてハ徒トと云すの如し○御方もも渡めるに
ハ赫映姫のと御心を掛と清らと思し人も人も非ぬ如く
 思して后女御の御方もも御婚す更も常に來通坐けると今

ハ何ぞ御用なりぬくハ渡めるも更もなしと何り幻卷去の後紫上卒絶
ハ御方もも渡めるに御獨寝成てと何り
 かハや姫の也もやもも御オホシフミカキカヨカカヨカカヨカ
 さハに何うハ同キかハしめひてたももハ木ノもハは
 ても御歌をよみてはるもん

○赫映姫の御許を外ホカ御方もも渡めるに赫映姫もと何り
 常に此姫子御心を掛け御婚坐るを加なすハ迫セるハ御文を
 通しめなり○御返事ハ諸本此事字を比と校本に有ハ補る
の○さへのハ姫を率往すと云ふ影成なる帝を強顔ふり奉
はしめるもさへに文通をひくハ然ぞつり憎らくハもてなしま

うぐさなりきんごの解ハ上玉枝の段は委云〇聞えかきしぬひさ
専姫の方子係まり〇面白き木草にはあてもい木草は花紅葉よ
そくもあちり桐壺源君藤壺女御に睦めよ如幼き心ちよもたのなる花紅
葉子はくても心ざしを見えまうこまぢう心とせ聞らぬは蓬
生蓬生君巻子の更との更とおのけうろ又いそぐ更なき程ハ同心なる文通をし
なごも打してこそ若き人ハ木草は附も心を慰めぬべしなごと
くまごあり玉の小櫛二の物四下の何ぞはさるゝ云更の條は春夏秋冬
冬時ふくの花鳥月雪は類をおうきさるゝ書顯源氏物語をるの更なりなど
是皆人お心を動かし何ぞは思をゆる物もく心は思更ある時ハ
殊なご空の氣色木草は色も何ぞはを催はくさるゝいさるゝことなる

と云はしを思へし諸本ありしを類本は従て改き〇御歌イホウカ
をよみてはしのはすは姫の方へ木草の花をよみたよとて御製を遣
るなごなり

追考

〇廿四 赫映姫イロハヒメのひきははしはる歌ハ姫の贈きを受る
中納言の方子舟云言なりおのハ彼方より此方にみえの
こ云とけのひと云言ハ此方よりやると云ハ已オウの態を口自云クチツカラな
と又彼方より贈を受る方とて然云ハ即彼方の態と此方と云
詞なり後撰恋三ミおのやけ使もく東ミヅの方へ罷らる程は始て相知く
はる女子かくなん止ヤシト更なき道なき罷ぬるわごと申て下はるを



後救使を改定しつゝ更めて召返す終らば此女悦なると諸実

間にはあそしふりけまど道もく人の志贈て侍らる呉服と云綾方へ

二端包フクハラ許女のほのりけ清原諸實と云綾子恋し有し

あぞ二村山も不越成よ此は女の問ははるしと云い又慶典侍

明子父忠の宰相み為賀し侍らるる玄朝法師の裳唐衣縫はる

くしふり終らば明子雲別る天の羽衣打著てハ君の千歳はあそ

らえやえなむとを以て卅一此とさな侍者ハ大和物語菟原

の段美女は親の云や誰も志の同様な終らば此とさな侍ものやん思煩

あそ侍らるる今世我子と悴意と云同意と云け

竹取翁物語解卷四

